へようこそ

堀尾悠香

昼間でもちょっぴり薄暗い体育館一階ロビーを通り抜けると見えてくる、木の看板と温かなロゴマーク。扉を開けばそこはまるで絵本の国。入った瞬間、世界中の絵本たちが私たちを出迎えてくれる。そう、ここはおはなしレストランライブラリー。島根県立大学短期大学部松江キャンパス自慢の絵本図書館である。

この短大に入り、おはなしレストランの活動を始めてはや一年。去年の今頃は、まさかこんな素敵なライブラリーが出来るとは思ってもみなかった。

おはなしレストランライブラリーは、一言で言えば「癒しの空間」である。室内のほとんどが木で作られているため、入った瞬間、木と絵本の香りに包まれる。絵本の表紙が見えるように特注で作ってもらった書架も印象的である。その書架を眺めて真剣に、時には楽しそうに絵本を選ぶ学生たち。そしてカウンターにはいつも笑顔で挨拶をしてくれる司書さんが二人。静かでゆったりとくつろげるライブラリーである。いつもここに来るたびに、「この空間だけ、時間がゆっくりと流れているんじゃないだろうか」と思ってしまう。

今回は、そんなおはなしレストランライブラリーの創業者（？）の一人である岩田英作先生に、おはなしレストランライブラリーが出来るまでのいきさつや魅力について話を伺った。また、おはなしレストランライブラリー専属司書の尾崎智子さんと内田絢子さんに突撃インタビューも行ったので、どうぞ最後までお付き合い下さい。

おはなしレストランライブラリーができるまで

おはなしレストランの活動は二〇〇五年に松江市立病院小児科病棟で課外活動ボランティアとしてスタートした。それが二〇〇六年に授業になり、様々な場所での活動の成果もあり、今や松江ではちょっと有名なレストランとして知られている。

そして二〇〇九年、おはなしレストランの活動は、優れた大学教育を支援する文部科学省大学教育推進プログラム（GP）に見事に選定された。

このGPに申請する際に、おはなしレストランライブラリーが生まれるきっかけとなった、とっておきの裏話がある。

「世界の絵本を集めた、絵本ライブラリーを作るってのはどう？」

始まりはある先生のこの一言だったという。GPの申請書に何を盛り込むか考えていた時の話だ。岩田先生はその一言を聞き、学生たちの読み聞かせ活動を後押しし、なおかつ一般開放もする絵本ライブラリーにしたら面白いのではないかと考え、「やろう！」と思ったという。それが二〇〇八年度のことである。そして見事に選定され、計画を実行し始めたのが二〇〇九年の九月のことである。

「おはなしレストランライブラリーを作るにあたって大変だったことはありますか？」という質問に岩田先生は一言、「忙しかった」。

まず、どこに作るのかという場所の問題があった。一般の人が利用しやすい場所（駐車場が近くにある、平坦な道など）となると、今の短大の図書館では無理がある。色々考えたが、条件に合ったぴっ

たりの場所が見つかった。体育館一階にある特別研修室である。しかし、用途変更の手続きが大変だったし、時間のゆとりもなかった。半年の間に会議室をライブラリーに変身させなければいけなかったのだ。

書架の設置や司書の確保、絵本の購入など、取組担当の方々は様々な準備に追われていた。そんな多忙な中でも、様々なところをきちんと工夫して作っているのがすごい。おはなしレストランライブラリーのロゴマークは、親と子供が寄り添って絵本を読んでいる姿をモチーフにしてある。三つの色は、おはなしレストランで養成する人間力の構成要素を表し、紺は「知識」、オレンジは「技能」、赤は「実践」をイメージしている。

また、ライブラリーのテーブルもロゴマークをモチーフとしたものになっている。絵本の表紙を見せるために特注で作ってもらったという書架や、ディスプレイ台も印象的だ。他に、玄関のすのこにも工夫がなされている。普通のすのこの隙間は数センチだが、おはなしレストランライブラリーのすのこの隙間は、子供の足の指がはさまらないように五ミリ程度になっている。こういった何気ない工夫を知り、温かな気持ちになった。何かを作る時に一番重要なものは、こういった何気ない優しさなのではないだろうか。

おはなしレストランライブラリーのコンセプト

おはなしレストランライブラリーの目的、狙いは三つある。

①読み聞かせに適した優れた絵本を収集する。

②海外（オリジナル）の優れた絵本を収集する。そして、絵本を通して諸外国の文化に触れる。

③読み聞かせやストーリーテリングなどをおはなしレストランライブラリーで行い、おはなしを通した地域交流の一つの拠点としていく。

確かにライブラリーの絵本はどれもユーモア溢れ、読み聞かせに適している

と思う。乳児向けの絵本から大人向けの絵本まで、様々なジャンルの絵本が収集されていて、読んでいてとても楽しい。子供たちに読み聞かせする絵本を探す途中で、絵本の世界に没頭してしまう時も多々ある。子供だけでなく、大人の心までも虜にするのがおはなしレストランライブラリーの絵本である。また、ただ絵本の読み聞かせをするだけでなく、外国の文化に触れることや地域交流を大切にすることを目的としているところが、このライブラリーの魅力である。

おはなしレストランライブラリーは、現在は短大の学生・教職員のみの利用となっているが、来年の四月からは地域の人たちに開放する予定だ。

「一人でも多くの人に来て欲しい。ライブラリーはあまり広くないけれど、来た人の心の中で夢が大きく広がるような図書館にしたい」と岩田先生は一般開放に向けての意気込みを語ってくれた。

来年度はきっと大勢の親子で賑わうであろう、おはなしレストランライブラリー。学生たちも多くの利用者（子供たち）に関わっていくのではないだろうか。絵本と学生、絵本と利用者、そして利用者と学生。この三者の繋がりが、これからのおはなしレストランライブラリーを支えていくのではないだろうか。

司書さんにインタビュー

八月の中旬、私はおはなしレストランライブラリー専属の司書である尾崎智子さんと内田絢子さんにインタビューを行った。「こんにちは。今日はよろしくお願いします」とライブラリーに入ると、お二人とも「こんにちは。こちらこそよろしくお願いします」といつものように笑顔で優しく出迎えてくれた。

堀尾　では、早速始めたいと思います。まず最初に、おはなしレストランライブラリーの司書になろうと思ったきっかけを教えてくださ

内田　岩田先生とマユー先生に紹介されたのがきっかけです。司書資格を持っていて、本に関わる仕事がしたかったので、不安もありましたがとても嬉しかったです。

尾崎　短大の図書館の司書の方に声をかけてもらったのがきっかけです。ずっと子供図書館で働くのが夢でした。

堀尾　ライブラリーの司書になる前は何をしていたのですか？

内田　一般企業で働いていました。その前は、この短大の学生だったんですよ。

尾崎　島根県立美術館の受付をしていて、子供が生まれてからは子育てをしていました。

堀尾　おはなしレストランライブラリーの魅力について教えて下さい。

内田　人と接する機会やコミュニケーションの場があるところが魅力的です。表紙が見える棚がたくさんあるのも、おはなしレストランライブラリーならではの魅力だと思います。

尾崎　ホッとできる場所だと思います。また、読み聞かせの実践の授業が素晴らしいと思います。今年度からサポートをしているのですが、学生たちがどんどん上達していって、凄いなあと思いますね。

堀尾　二人のオススメの絵本を教えてください。

内田　村山桂子さんの『おかえし』、香山美子さんの『どうぞのイス』……あげたらキリがないんですけど、このライブラリーで見つけて好きになったのが瀧村有子さんの『ちょっとだけ』です。学生時代からずっと好きなのがヘルメ・ハイネさんの『きみがしらないひみつの三人』です。

尾崎　たくさんあります。加古里子さんの『とこちゃんはどこ』とか、大好きです。でもやっぱり全ての絵本に思い入れがありますね。

堀尾　おはなしレストランライブラリーの司書になって大変だったことは何ですか？

内田　オープン前に絵本の登録が終わらなくて……その準備が大変でした。司書経験が全くなかったので、登録の仕方を図書館の司書の方に教えてもらいながら頑張りました。

尾崎　一からのスタートだったので、何もわからなくて大変でした。絵本のコーティングから登録まで、司書の方に聞きながら頑張りました。

堀尾　楽しいと思う瞬間はどんな時ですか？

内田　やっぱり学生さんが利用してくれている時です。「ここ癒されます」って言ってもらえるのが本当に嬉しいですね。また、知らない絵本が入ってきて、それを見るのもとても楽しいです。

尾崎　学生たちと絵本の話をする時が一番楽しいですね。また、学生が絵本を手

（次頁最下段へ続く）

棚田便り
雲南市山王寺から

食と農の経済ゼミ◎舩木美友紀・池田理絵・岩本藍花・岩山早紀
大山友紀・堺恵梨雅・田中大恵・常角　優・濵田衣里・山本有沙

（前頁より続く）

にとって見る姿を見ると幸せな気持ちになります。

堀尾　最後に、来年の一般開放に向けての目標や意気込みを教えて下さい。

内田　様々な人に気軽に訪れて欲しいです。利用者の方と司書とのコミュニケーションを取り、温かいライブラリーにしていきたいです。また、利用者と学生のコミュニケーションも繋げて行きたいですね。

尾崎　子供が大好きなので楽しみです。たくさんの人に来て欲しいですね。「またここに来たい」という気持ちを持って欲しいです。自分も、「来てくれてありがとう」という気持ちを持ち続け、それを伝え続けていきたいです。また、子供たちだけでなく学生にもずっと来て欲しいです。絵本と学生、絵本と子供たちはもちろん、学生と子供たちを繋げて行きたいです。そして、一冊でいいから大好きな（大切な）絵本に出会って欲しいです。きっと大人になってもう一度読んでみたら温かい気持ちになります。

堀尾　ありがとうございました。これからもおはなしレストランライブラリーの司書として、多くの人々に絵本の面白さや素晴らしさを伝え続けて下さい。

（ほりお・はるか／日本語文化系二年生）

私たち「食と農の経済ゼミ」では、日本人の主食である米について学んでいます。その一環として、私たちは雲南市大東町山王寺の棚田でフィールドワークを行っています。

山王寺へは、短大から車で三十分弱で行くことが出来ます。短大を出発し、忌部から峠を越えて雲南市に入り、しばらくすると右手に折れます。そして、山道をひたすら登って行くと、パッと棚田の景色が広がります。聞くところによると、この棚田は約二百枚で十九ヘクタールあるそうです。また、一九九九年度には農林水産省の「日本の棚田百選」に選ばれました。このような素敵な棚田で、私たちは山王寺の地域の方々が外部から参加者を募って行っている「田んぼの学校」で農業体験をしています。

これまで、五月二十三日に畔塗り・代かき・草刈り、六月六日に田植え・サツマイモ植え、七月二十四日に自然調べがあり、山王寺の地域の方々や外部から参加した親子連れと一緒に活動してきました。また、今後の活動としては、九月二十六日に稲刈り、十月二十四日に棚田祭り・収穫祭を予定しています。

私たちは、フィールドワークに行く前に、山王寺の方からお土産で古代米を頂いていたので、まずは古代米おにぎりパーティーをすることにしました。みんなで炊飯器や白米、塩や漬物などを持ち寄り、準備万端です。古代米の色は真っ黒で、これを白米といっしょに炊いて美味しいものが出来るのかと少し不安でした。しかし炊き上がってみると、赤飯のような色をしていました。

これをみんなで「熱い、熱い」と言いながらおにぎりにして、和気あいあいと食べました。片手におにぎり、片手に漬物という恰好で写真撮影もしました。古代米は、プチッとしているような少し固めの不思議な食感でした。

私たちはフィールドワークだけでなく、米の消費、減反政策の歴史、米作りの担い手、世界の米事情、有機栽培、世界の米料理など、各自興味を持ったことを積極的に調べてまとめようとしています。調べていくうちに、様々な問題も見えてきて、米作りというのは奥が深いんだと改めて感じました。

それでは、私たちがこれまでに書いたフィールドワークの体験記です。どうぞ!!（所々括弧書きでコメントが入っていますが、これはゼミ担当教員の独り言です。）

五月二十三日

■天気は雨模様。最初のフィールドワークだというのに！　私はギリギリまで「延期にならんかな～」と、ほんの少しですけど期待していました。（稲刈りじゃあるまいし。少々の雨で中止になるわけないでしょ！）

■山王寺までの道はとても険しい山道でした。車酔いしなくて本当によかったです。私は最初、山王寺はお寺だと思っていました。お寺ではなくて地名であることがわかったときは、「あれっ？」。（こんな勘違いをしている人がいたなんて……。）

■女子学生十名はみんなジャージを着用し、足には前日ホームセンターで購入したお揃いの長靴、首には色とりどりのタオル。そしてこれも前日に百均で買った合羽を着て、もう万全の構え。開会式も終わり、いざ！田んぼへ。（いやー、このスタイルにみんなの意気込みを感じました。）

代かき・畔塗り班

■どうやって田んぼに入るか迷いましたが、結局「素足」に決定。恐る恐る足を

入れると、ズボッ！　鍬で畔を切る作業を行いましたが、最初は身動きがとれません。でも、熱中してやっていると、いっしょに作業していたおじいちゃんに、「あんたは百姓の出身かね？」と尋ねられました。「いいえ、農業は初体験です」と答えると、「いい手つきしてるけん、嫁にほしいわ」って言われました。（そんな会話があったとは知らなかった。）

■事件はここで起きました。だいぶ作業にも慣れ、おじいさんにも「そげな具合だ。うまい、うまい」と褒められ、調子に乗りはじめたころ、足に何か違和感が……。嫌な予感。恐る恐る田んぼから足をあげてみると、ヤツらが私の足にへばりついてるじゃありませんか。そうです。ヒルたちです。足から血を流す私にカメラを向け、うれしそうにシャッターを切る記録係の先生。地元の方たちも心配しつつ笑っておられました。（貴重な一枚、ありがとうございました。）

草刈り班

■草刈機のエンジンをかけるのは難儀でした。なかなか紐が引けないのです。草を根元から刈るのも難しかったです。下を狙いすぎると草刈機の刃が土に触れて危険です。しかし、作業が終了する頃には、私たちの腕はだいぶ上達していました。（よく怪我しなかったなあ……。）

■作業前、草がいっぱいだった所が、作業後スッキリきれいになったのを見て、心もスッキリ。草刈機は最初、全く使いこなすことができなかったけど、終わり頃に「だいぶ上手くなったね」と褒めていただき、うれしかったです。（私も年に何回か実家の草刈りをしますが、最近このスッキリ感にはまっています。）

サツマイモ畑準備班

■サツマイモ畑のマルチ張りをしましたが、これがもう大変でした。高校時代に手作業のマルチ張りはしたことがありますが、今回は耕耘機のような大きな機械を使って張りました。これがすごく重くて、なかなか言うことを聞かない。女の子一人の力では手に負えず、地元の方に手伝ってもらってやっと一列マルチを張ることができました。まるで運動会の綱引きをしている感じでした。

■作業が終わったあと、参加者全員がお蕎麦を食べながら交流をしました。全員が一人ひとり簡単な自己紹介をしました。「若い女の子が農業をしている姿を何十年ぶりに見た」と、私たち短大生のことを褒めてくださる方がたくさんおられて、とてもうれしかったです。（素足で田んぼに入ったこと、ヒルに噛まれたことも高い評価を受けていましたね。）

六月六日

■今日は田植え。前回とは異なり快晴。日焼け止めクリームをたっぷり塗って、万全の態勢で臨みました。私以外の四人は、ヒルに噛まれるのが怖いので、普通

は手につけるやつ（「腕貫（うでぬき）」って言うんですよ）を買ってきて足につけていました。その光景は異様で、なんだか面白かったです。私は裸足で入りましたが、ヒルには噛まれませんでした。よかった……。（そうですね。私は長いこと生きてきましたが、「腕貫」を足にしている人に出会ったのは初めてです。）

■まずババヒキという、田んぼに線を引く作業をしました。いざ！　田んぼの中へ……。「う、動けない」「キャー」と、大騒ぎしながら線を引いていきました。「完璧だー！」と思って後ろを振り返ると、「アレ？　グニャグニャ？」。（いいんですよ。あなたはババヒキに最初に挑戦した人だからね。）

■田んぼに入った瞬間、土が軟らかくて気持ち悪かったです。オタマジャクシがたくさん泳いでいました。カエルもたくさんいました。本当はカエルなんて大嫌いですが、そんなことを気にしていたら先には進めません。なりふり構わず頑張りました。終わったあとのおにぎりと田舎汁（豚汁）は本当においしかったです。（「なりふり構わず」――いいですねえ。）

七月二十四日

■山王寺も今回で三回目。今日は自然観察です。最初は「どんなことをするんだろう？」と非常に心配でした。しかも、開会式のときに「マムシに注意してください」とか、「くれぐれも草むらの中に入らないように」とか言われたので、「怖いなー」。

■タモを持って近くのため池に向かいましたが、「虫とかカエルなんかを捕まえるなんて嫌だなぁ」と、ひとりでぶつぶつ……。でも、オタマジャクシを初めて見ることができたし、メダカやエビ、タニシなどを捕まえることができました。メンバーのひとりがヒルを捕まえたのには、びっくりしました。（ひとりでぶつぶつ言ってたなんて、私もびっくり。）

■この日は案山子（かかし）作りにも挑戦しました。地元の人たちも作っておられたので、見よう見まねでやっていたら、すごくダンディな案山子さまが完成しました。美友紀ちゃんが特別製作したところも輝いていたと思います。お顔も優ちゃんのお絵かき技術によって凛々しい男性にすることができました。（「特別製作したところ」って何ですか？）

■今日は棚田の畔に明かりを灯すイベントもあるため、夕方の開始でした。案山子作りが終わると夕食です。今回も地元のお母さんたちがカレーライスを作ってくださいました。とてもおいしくて、二杯も食べてしまいました。（みんな、よく食べましたね。）

■辺りがだいぶ暗くなってきた頃、棚田の畔に立てられていたたくさんの松明に火がつけられました。煙が立ちこめて少し煙たかったですが、とてもきれいでした。

短編小説

バイキング

千原あずさ

今日は、友達とバイキングに行く予定だ。ちょっとした伝手で、バイキングのタダ券を手に入れたのだ。バイキングは、高級ホテルの一階にあるレストランで行われる。九十分間、食べ放題だ。しかも、三ツ星レストランだ。特にデザートが美味しいらしい。

たくさん食べられるよう、ズボンは腰の所がゴムのものにした。上の服も、お腹が目立たないように大きめのものだ。朝ごはんも食べなかった。長い髪が邪魔にならぬよう、一つにくくった。抜かりはない。

待ち合わせ場所の公園まで、ゆっくりと歩く。少しでも気分を落ち着かせるためだ。バイキングと聞くと、私の気持ちは高ぶる。その場にいる誰よりも、食べなくてはいけない。そう考えてしまうのだ。友達には、バイキングを競技か何かと勘違いしている、と言われた。思わず納得した。確かにそうかもしれない。この気持ちの高ぶりはきっと、闘志だ。

待ち合わせの公園は、カップルや親子で溢れている。ひと組の親子が、キャッチボールをしていた。いつもなら、ほのぼのとした気持ちで見ていただろう。しかし、今日の私は違う。私は、バイキングという戦場を前にした、武士なのだ。そんな光景で癒されはしない。興奮を抑えるために、深呼吸をする。呼吸に合わせて、お腹が鳴る。そうかそうか、お前も気合を入れているんだな。健気なお腹をなでてやる。

数回、同じことを繰り返したところで、ふと近くの人から視線を感じた。不審な目で見られている。「この女、大丈夫かよ」といったところだろうか。繰り返し行われる深呼吸。その度に鳴る腹。こんな人がいたら嫌だ。いや、正に私なんだけどね。近くの人は、私と目が合うと、パッと視線をそらした。いたたまれない。不審者じゃない、と叫びたい。しかし、そんなことをしたら、完全に不審者だ。

落ち込んだら、またお腹が鳴った。

他に何かしようと思い、ズボンのポケットから携帯を取り出す。時刻を確認すると、約束の十分前だった。待ち受け画像のケーキが、死ぬほど美味しそう。空腹を紛らわすために、友達が来るまでずっと見ていようか。そんな考えが、頭をよぎった。

友達にその気持ちが、伝わってしまったのだろうか。待ち受けのケーキが消えた。代わりに、友達からの着信を知らせる画面になる。着信音が鳴らないうちにでる。

「もしもし」

電話にでるの早すぎない。とかなんとか聞こえるけど、無視だ。

「どうしたの」。約束の時間前に来る電話は、たいてい、良い内容じゃない。遅刻するとか、最悪の場合は——。

「ごめん。今日、行けなくなった」。ドタキャンだ。

私は友達をなじった。一人でバイキングなんて嫌だ。嫌じゃない人もいるかもしれないけど、私は嫌だ。一人で行ける人は、ほんの一握りだ。その人はもう、勇者だ。ヒーローオブバイキングとでも呼んでやる。残念ながら、私はヒーローじゃない。キングオブバイキングになら、なってもいいと思うけど。そう、そして私は今日、キングオブバイキングになるくらいの意気込みで来たのに——。

友達が来ないのでは、ヒーローオブバイキングになるか、ロンリーバイキングになるしかない。どちらも嫌だ。というか、どっちも同じだ。

さんざん友達をなじった。相当、私はしつこかった。ネチネチと友達を責めた。いや、攻めた。そうすれば、友達も諦めて来てくれるだろうという、甘い考えが少しはあったからだ。しかし、現実は厳しい。

「くどい」

その一言で、通話は終わった。慌てかけ直す。数回

のコールでやっと出てくれた。
「ただいま、電波の届かない所にいるか――」。プツッ。
友達の対応の速さに完敗だ。
焦る気持ちが、私を追い込む。公園のベンチに腰掛けてみる。足をそのままにしておくと、貧乏揺すりを始めてしまうので、足を組む。ついでに腕も組んでみた。
春の紫外線をたっぷりと含んだ太陽が、私の顔を照らす。目を閉じて、上を向く。考えるときは、いつもこのポーズだ。目を閉じると、太陽の光が瞼の裏側で弾ける。緑色の光で溢れた。目を開けると、周りが赤く見えるだろう。
周りの音がよく聞こえる。どれもこれも、楽しそうな声だ。そんな中で私は一体、何をしているんだ――。
「よしっ」。バイキングへ行こう。

街の中を歩くと、余計に太陽をまぶしく感じた。高層ビルに、光が反射している。手で日よけをして、人と人との隙間を縫う。避けきれずに、二回ほどぶつかった。
何を思ったか、私は横を向いた。すると、少し離れた所に男性が見えた。身長が二メートルあるのではないだろうか。すごく目立っている。ずっと見ていて気が付いた。その大男と、私の歩くペースが同じだったのだ。一定の距離を置いて、同じ速度で進んでいる。
一度気が付くと、とても気になる。相手より遅く歩くのは嫌なので、歩調を速めた。ここまで来れば、もういいだろうと横を見る。
大男は真横にいた。
人の目を気にせず、舌打ちをしたい気分だ。なんで奴は、付いて来ているんだ。
先ほどよりも、スピードを上げて歩いた。すれ違う人が、迷惑そうな顔をしている。競歩の選手のように、必死に歩いた。息がだんだんと上がってくる。私の歩調も、それに合わせて速くなっていく。私が出せる最高速度を保ちながら、横を向く。このスピードならもういないはずだ、と確信していた。
だが、大男はそこにいた。しかも、私がその大男を見た時に、相手もこちらを向いたのだ。突然の事に、ギクリとする。見ていたことが、バレたのだろうか。後ろめたい気持ちが湧いてくる。しかし、そんなことは一瞬の出来事だった。大男は、私の方をチラリと見たかと思うと、ニヤリと笑ったのだ。
顔に血液が集まってきた。頭の中で私は、目の前の大男を十発は殴った。
大男を思いっきり睨んだ。そして、笑ってやった。大男に笑顔の意味は伝わった。ニヤケていた男の顔が変わる。そして、奴は歩調をさらに速めた。
向こうの方が、足が長い。大男は大股で歩いている。私はピッチ走法を応用した歩きで対抗した。歩く幅は狭いが、その代わりに左右の足を相手よりはやく出すのだ。
この勝負は長引くかと思ったが、アッサリと終了した。歩くことに夢中になりすぎて、目的地のホテルを通り過ぎていたのだ。
ホテルを通り過ぎたことに気が付いた私は、クルリと体を反転させた。そして、走った。
なぜか急に、見知らぬ男との子どもじみた勝負に、恥を覚えた。羞恥を吹き飛ばす勢いで、とにかく走った。

ホテルの入り口で、息を整え、勢いよく回転ドアをすり抜ける。足の裏にフワッ、とした感触を感じた。床には赤い絨毯が敷いてある。コンクリートの上を歩いて来たから、不思議な感じだ。まさに、地に足がつかない。フロントでは受付嬢が、笑顔で対応している。ホテルが一流となれば、受付嬢も一流だ。どこから、こんな美人ばかり連れて来たのか、尋ねたい。
レストランに近付くにつれて、良い匂いがしてきた。さっきまで忘れていた空腹感が、戻って来る。
レストランは大入り満員だった。紙に名前を記入し、近くの椅子に座って待つことになった。先ほど紙の横に書いた一名様が、私を悲しくさせる。
私はそこまで待つ必要もなく、席に案内された。外からよく見える、窓側の席だった。どうやら、一人でバイキングに来ている姿を見られるらしい。今日は、恥をかく機会が多いようだ。
「時間になりますと、こちらの機械が鳴りますので、会計までお越し下さい」
そう言って案内役から、小さなボタンの付いた機械を渡された。最近は技術が進歩したな――と感心して眺めていると、別の店員が走って寄って来た。そして案内役の人と、コソコソ話をし始める。こういう時はいつも、自分に関係があろうがなかろうが、話の内容を知りたくなる。さりげなく、聞き耳を立てた。一名様が、とか相席がどうのと、聞こえてくる。私に深く関係が、ありそうだ。そうして、しばらく聞いていると話しかけられた。

私は何も聞いていません、という風に返事をするのがミソだ。

「申し訳ございません。本日は大変、混んでおりまして――」

店員の言葉を要約すると、お前のように一人でバイキングに来た愚かな奴がいるから、愚か者どうし仲良く一緒のテーブルで食べろや、ということだった。

「ああ、良いですよ」

正直に言うと、相席は嫌だ。しかし、私と同じヒーローオブバイキングに、興味があったのだ。そいつが真のヒーローか、私が確かめてやろう。

外を歩く人々に、見てんじゃねーよ、とメンチを切ってみる。

「こちらのお客様と、相席となります」。店員の方を向く前に、「よう」と親しげに声をかけられ、店員の後ろにいるヒーローの顔を見た。

「ジーーーーーーザス!」と内心、絶叫だった。仏教徒だけど、叫びたい。大多数の日本人のように、宗教にこだわっていないけど、叫びたい。

ヒーロー……大男はニヤニヤしながら椅子に座る。椅子とテーブルが小さく見える。どこまでデカイんだ。

「さっきは、どうも」

「何がよ」

「アンタが急にいなくなったおかげで、こっちはバカみたいに一人で、早歩きするはめになったんだ」

ププッと相手を小馬鹿にしてやりたい。

「別にそれは、私のせいじゃないでしょ。こっちこそ、アンタのせいでホテルを通りすぎたんだから」

それこそ俺のせいじゃないだろう、と呆れた顔をされた。

「で、なんでアンタここにいんのよ」

「いやな。アンタに一言文句を言おうと、引き返して来たら、ここにアンタが座っているのが見えたんでね」

やっぱりこの窓側の席は、ヒーローオブバイキングには向いていない。

「わざわざ文句を言いに、ここに入ってきたわけ」

言葉には思いっきり、バカじゃない、というニュアンスを含ませる。それを感じ取った大男は、不敵な笑みをみせた。

「さっきの勝負の、ケリをつけにきた」

勝負という言葉に、体が動いた。それを見た大男は、続ける。

「さっきの勝負は、まあ不戦勝みたいなものだ。だから、このバイキングでより多く食べた方が勝ち、ってのはどうだ」。そんな馬鹿な質問に対する答えは、もう決まっている。

「受けてたつわ」

なぜなら、私も馬鹿だから。

私と大男は、不公平がないよう、同じ料理を大皿に取っていった。大皿は、私の両腕で円を作ったくらいの大きさだ。私たちは、サラダにかけるドレッシングまで、同じものにした。

そうして、次々と大皿に盛っていく。そして気付けば、テーブルの上には大皿が、十二枚あった。

まだ作りたてのシュウマイからは、湯気が立ち昇っている。きっと多くの香辛料を混ぜて作られたであろうカレーは、食欲をそそる匂いだ。これが本場か、と思わず唸った。サラダの上にのっているエビは、ぷりぷりで私に食べられるのを、望んでいる。

テーブルを見た途端に、口中が唾液まみれになった。この時だけは男との勝負を忘れた。本能のままに、料理をむさぼ

りたい。死因は食べ過ぎでいい――。

「よし、じゃあお互いに六皿がノルマだ。制限時間は、あんたの機械が鳴るまでいいだろう」

はっと大男を見ると、奴はもう箸を握っていた。私も慌てて握る。互いに見合い、どちらともなく、大皿に箸を伸ばした。

食べる順番など、何も考えなかった。目の前にあるものを、口に放り込んだ。食べるというより、呑み込んだ。しかし、美味い。勝負というのを忘れて、じっくりと噛みしめたくなる。そんな自分を叱咤し、ひたすら食べ続けた。

開始から十分、相手の進み具合を、上目遣いで確認する。今のところは互角か、やや私が優勢だ。近くにあった鶏肉を、口に放り込む。

――ああ、美味い。

もうこれは、拷問だ。

ようやく三皿目を食べ終え、四皿目に視線を移した。そして、後悔した。四皿目には、中華料理がこんもりと盛られている。滲み出た油が、てらてらと光っている。大皿にのせたときは、湯気がたって美味しそうだったシュウマイも、今では冷めて堅そう。シュウマイの一つを口に入れ、噛む。ブワッと広がる、生温い肉汁。背中に汗が伝った。口を動かす度に、目の前も揺れる。いま口を開けば、トイレに直行するしかない。コップに注いであるお冷だけが、私の味方だ。腰のところがゴムのズボンも、今ではピチピチになっている。もう、お腹がいっぱいなんじゃない。胸がいっぱいだ。

ようやく一つのシュウマイを、呑み込めた。料理を見ているだけで、トイレに駆け込みたくなる。深呼吸とともに箸を置き、大男の状況を確認する。

目が虚ろになった。大男は、初めと変わらぬスピードで食べ続けていた。いや、少しはスピードが落ちているかもしれない。しかし、食べ続けている。そしてその食べ方の汚さといったら、言葉にできない。直視できない。初めの方は、あんな食べ方ではなかったはずだ。大男も、限界が近付いているのだろう。目が、どこを見ているのか分からない。顔には、水滴がいくつか付いている。大男は五皿目を食べ終わった。いよいよ、最後の大皿だ。大男は、体格に見合った口をあけた。が、その口に料理は入らなかった。

大男は、口から滝をつくったからだ。美しくない方の滝だ。

私たちのテーブルの近くでも、新たな滝が発生した。もらい滝だ。どうやら、私たちの食べっぷりを見ていた人がいたらしい。大男の食べ方を見ていたら、それはもう滝をつくるしかないだろう。

私は、耐えた。ダラダラ汗を流しながら、耐えた。もし一歩でも歩き、振動を与えたら、アウトだ。だから、トイレにも行けない。口を開いて、袋を要求したいが、口を開くことができない。それは、あらゆるものからの、カイホウを意味する。

しかし、三人目の滝を見たときに、私の中のダムは決壊した――。

その後、レストランは大混乱になった。客のほとんどは、時間が余っていようと、レストランを後にした。滝をつくった連中は、店員の手厚い看護を受けた。だが、背中を擦るのは止めてほしい。ダムが閉まらなくなる。

騒ぎは、一時間程で収まった。滝をつくった連中みんなで、レストランの人にお詫びと、感謝をひたすら述べた。その一連の動作から、私たちの間では一種の絆が生まれつつあるようにすら、感じた。

レストランにこれ以上の迷惑をかけぬよう、歩けるまで回復した者から、去っていく。その顔はどこか、清々しい。

残ったのは、私と奴の二人だけになった。なんとなく、二人で歩調を合わせ、ゆっくりと玄関へ向かった。玄関を出ると、ビルに反射した西日が、私の目を刺した。思わず手で覆う。

「またな」

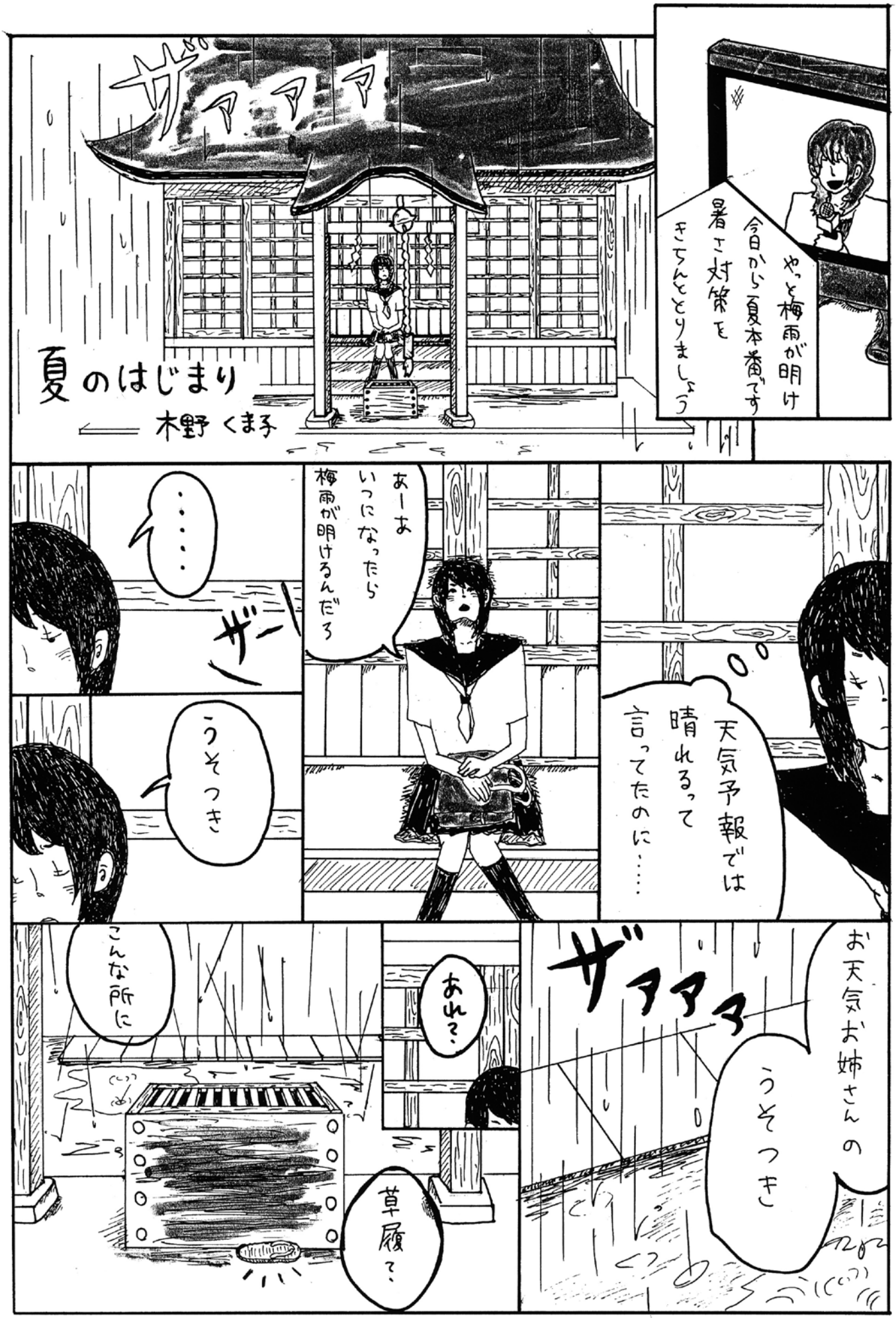
ボソッと聞えた声に、奴を見た。奴は、人ごみに紛れて行く。頭ひとつ分、飛び出ているので紛れきれていないが。その頭を、夕日が照らす。スポットライトでも、当たっているようだった。奴は、一度も振り返らなかった。ただ右手を上げ、ヒラヒラと振っただけだった。

もうじきあたりは暗くなり、奴もそれに紛れるだろう。

「ばいばい、キング」

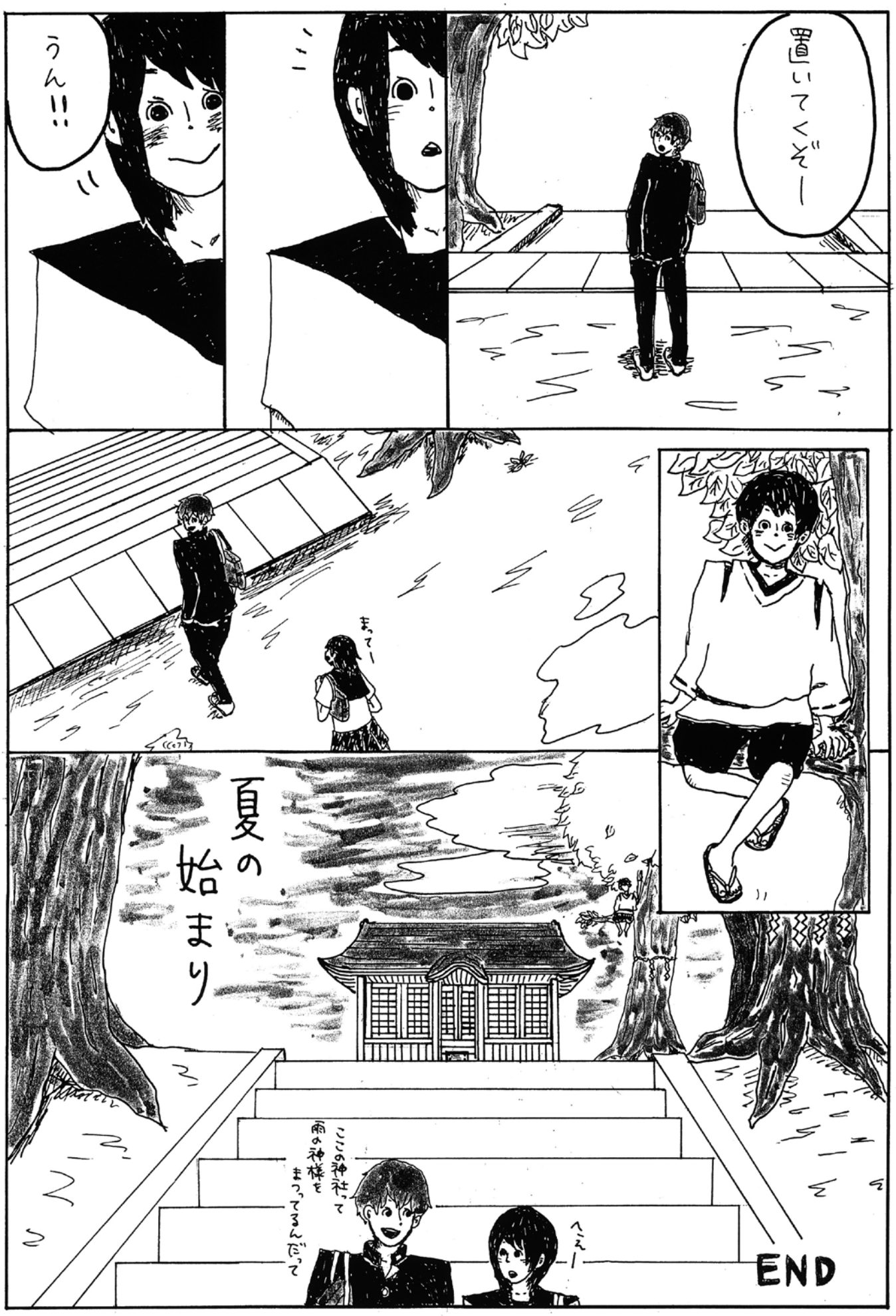
キングオブバイキングは、あんただよ。

（ちはら・あずさ／日本語文化系二年生）


ザアアア
夏のはじまり
木野くま子
やっと梅雨が明け
今日から夏本番です
暑さ対策を
きちんととりましょう
天気予報では
晴れるって
言ってたのに……
あーあ
いつになったら
梅雨が明けるんだろ
……
ザー
うそつき
お天気お姉さんの
うそつき
ザアアア
あれ？
草履？
こんな所に

今どき わらの草履？ しかも小さい…
ガタガタッ
ガタッ
!!
いっ いつの間に!?
ぎゅっ
変な服装の子 どこから 来たのかな？
くるっ
え？
あ!! それ、僕の草履 お願い、返して！
バッ
これが無くて よかった… 帰れなかったんだ
じゃあ僕、帰るね お姉ちゃん 拾ってくれてありがとう！
待って!! そのままじゃ 濡れちゃうよ

行っちゃった…
ドン!!
あー ぬむい…
こんどは何?!
橘くん?
カサを忘れちゃって雨やどりしてたの 突然降ってきたから…
あれっ 田中じゃん 何してるの?
俺も雨やどりしてたんだけど 気が付いたら寝ててさ…
あれっ?
さっきまでどしゃ降りだったのに 何で?
太陽久しぶりに見た!!
いつの間に晴れてるじゃん
ふしぎだなー
じゃあ、帰るかな 田中!!



（木野くま子＝本名：米田　茜／生活文化デザイン系２年生）

街のおもしろ文化観察学入門

その五 米子編

権田真子・上田絵里子・竹ノ下美穂

米子港近くの公園から始まった街のおもしろ文化観察学。さっそく出発からおもしろそうなものを発見!!

「これはなに?」

なんとそこには大きなヤドカリの像が!! なぜこんなところにヤドカリが!? 取材メンバーみんながヤドカリの像の前でにらめっこ……。

そんなこんなで始まった街のおもしろ文化観察学。今回は文化資源学系一年生三人と日本語文化系一年生一人の計四人で米子の街を歩きました。

まず加茂川沿いの道を行くことにしたのですが、歩き出して気になったのが道に点在するお地蔵様。なんとこのお地蔵様、体中に紅白のお札が貼ってあるのです! 思わず立ち止まってしまいました。なぜこんなにお札がたくさん貼ってあるのか、取材メンバーでわかるはずもなく、ちょうど近くにおもしろそうな自転車屋さんがあったので、ここの店主に聞いてみよう!ということになり、お店をのぞいてみると……この日は定休日。残念……。ということでまたぶらりぶらり。到着したのは鹿島茶舗。

■ヤドカリの像と一緒に記念撮影。

取材メンバーが家の前に立っていると中からご主人らしき方が登場。私たちが挨拶する間もなく、どうぞ入ってくださいと手招きしていただきました。この家には、昔、米子城にあったしゃちほこが置いてあるとか。早速私たちも見せていただきました。そして、ご主人がプリントを配って、しゃちほこの説明をしてくださいました。

鹿島茶舗の鹿島家は昔、現代で言うところの銀行業をしていて、大金持ちだったとか。嘉永五年(一八五二)、米子城の小天守閣改築の修理費として本家鹿島と分家鹿島の両家で七千両〜一万両出したそうで、そのとき古いしゃちほこ(初代)を記念にもらいました。そして、本家と分家でしゃちほこをひとつずつ分けました。鹿島茶舗は本家のほうです。

鹿島茶舗の中庭にあるしゃちほこ(初代)は、以前は地面に直接置いていましたが、雪が降ってスコップなどで除雪をしたときに、しゃちほこに当たって傷がいっぱい出来たため、今は立派な石の台の上に置いてあります。

二代目の嘉永六年製のしゃちほこは、米子城所有者の武士団の一人であった伊吹一太郎が義方小学校初代校長を務めていたことから、義方小学校の屋根に飾られましたが、今はガラスのケースに入れて同校の玄関に飾ってあるそうです。

■(上段)紅白の札が貼られたお地蔵さん。(下段右)通路に突き出た珍しい階段(鹿島家の裏に抜ける通路)。(下段左)鹿島茶舗のご主人と一緒に。

そこで、私たちは義方小学校に行ってみようということで、鹿島茶舗のご主人に道を聞いて義方小学校に向かって歩き出しました。

歩いている途中見つけたのが、「日の出湯」という銭湯。昔ながらの銭湯にみんな懐かしくなりながら写真撮影、さらに歩いていきました。そして次に見つけたのはごみ収集所。ここのごみ収集所、昔は消防ポンプ小屋として使われていたそうです。だから少し形が変わっていて、おもしろいなぁと思いながら見ていました。そんなこんなで、歩いていくと義方小学校到着。早速、職員室におじゃまし、事情を説明して、しゃちほこを見せていただきました。

ガラスケースにきれいに大切に保存されていました。そして、義方小学校では、しゃちほこを学校のイメージキャラクターにして、生徒たちを「しゃちっ子」と呼んでいるらしいです。こうして歴史が受け継がれるのはすばらしいことだなと思いました。

■（上段右）昔は消防ポンプ小屋として使われていたごみ収集所。（上段左）偶然見つけた風情ある銭湯。看板がいい感じ！（下段）義方小学校に飾られているしゃちほこ。

義方小学校を出て、元の道まで戻って再び加茂川沿いを歩いていくと……。ありました！　江戸時代のような構えの家が。家の前に立ってみると、左側が空き地になっているため家の壁がカーブしているのがわかります。「とても珍しい」「気になる」ということで早速、家におじゃましました。出てこられたのは、優しそうな奥さん。家の中に入ると、天井が高くて、大きな神棚もあり、なんだか時代劇の舞台のような家です。

なぜこんなに広いのかというと、江戸時代にこの船越さんの家は回船問屋をやっていたとか……。家の壁がカーブしていたのは、縁起をかついで「末広がり」の構造になっているため。なるほど……。一般家庭ではこんな家はありませんよね。

なんて思いながら船越さんの家を出て、次に到着したのは岡本一銭屋。岡本一銭屋は『のんびり雲』第二号（二〇〇八年）でも取り上げられています。今回は取材というより、休憩のために立ち寄りました。今ではあまり見られなくなった駄菓子屋さん。岡本一銭屋に入って一番最初に目に入ったのが数々の芸能人の写真。そして、大阪から来たという観光客の人も……。本当、おばちゃんは米子の有名人だなと思いました。

そして、また道を歩くと川の向こう岸に「しょうじき村」と書かれたブロックのようなもの（実はプランター）がたくさん。なんだ!?あれは。でも謎は解明できず……。いつか解明したいなぁと思いながらまた歩きはじめました。

■（右上段）末広がりになった珍しい形の船越さん宅。（右下段）大きな梁、高い天井、明かりとりの窓。（左上段）玄関を入って少し進むと大きな神棚が。（左下段）現在は使われていない、吊り上げたままの昔の戸。

加茂川遊覧船の乗船場の所にカッパの像を発見。米子弁で「ようきなった」と書かれていて、来られた方々を歓迎していました。加茂川沿いを歩いていくとカッパの親子や、水木しげるさん作「河童の三平」の像があります。「河童の三平」のカッパはスイカを持っていて涼しげでした。

笑い通り商店街から一本入った加茂川沿いを歩いていると、かわいらしいお地蔵さんがいました。その名も「咲(わら)い地蔵」。「咲う」という字は古事記に由来し、「笑う」の古語で、「念ずれば花開く」という思いが込められているそうです。手をあわせてにっこりと微笑んでいました。思わず同じポーズでみんなで記念写真を撮ってしまいました。見ているこっちまでにこにこしてしまう、そんなあったかい気持ちにさせてくれるお地蔵さんでした。

あとで調べてわかったことですが、米子の下町では古くからお地蔵さんに札打ちをするという風習があります。これは、市内の中心を流れる加茂川沿いに数多くあるお地蔵さんにお札を貼って、亡くなった人を供養するというものです。その一つでもあるこの「咲い地蔵」は、お地蔵さんの中でもシンボル的な存在らしい……。

■（上段）岡本一銭屋のおばちゃんと。（下段）しょうじき村と書かれたプランター。しょうじき村とは一体……？

■（左）カッパの親子。（右）水木しげるさん作「河童の三平」の像。

米子本通り商店街（アーケード）に入ると、琴がたくさん並んでいるお店を見つけました。看板を見ると「三国屋楽器店」と書いてあります。お店の方にお話を伺うと、このお店は和楽器専門店。太鼓、尺八、三味線、琴などを扱っているお店で、現在の店主の田村武さんで四代目だそうです。今は五代目の息子さんに琴の弦や三味線の皮の張替えなどの技術を引き継いでいるそうです。このお店は明治十年ごろの創業で、なんと一三〇年もの歴史がある老舗の和楽器専門店でした。

山陰全体でも和楽器専門店はここしか残っていないそうです。また弦の張替えや修理などが出来るお店も今では少なく、県外からもお客さんが来られるそうです。地元の高校である米子西高校には箏曲部というのがありますが、その部の琴の修理や弦の張替えなどもすべてこの三国屋楽器店さんがなさっているそうです。偶然にも私は米子西高校出身だったので、箏曲部ではなかったのですが、意外な接点があり、とても驚きました。つい取材そっちのけでローカルトークで盛り上がってしまいました。

■咲い地蔵と同じポーズで記念撮影。

ご主人が琴を少し弾いてくださったのですが、普段の生活で琴の音を聞く機会というのはあまりないので、改めて聞くとやはりとてもきれいで、暑さも忘れてしまいそうでした。またご主人は島根県立短大の松江キャンパスには和楽器などを演奏する邦楽部がないことをとても残念がっておられ、私たちに「ぜひそういうサークルを作ってほしい！」とおっしゃっていました。

三味線についてお話を伺っていたら、三味線の皮は犬の皮を使用していることが判明して一同びっくり。犬の皮はタイやベトナムからの輸入品だそうです。しかも飼われている犬では小さすぎて、野

■三国屋楽器店入口。歩いていると店内に並べられた琴が目に入りました。

■（上段）三国屋楽器店のご主人が琴を演奏してくださいました。つい聞き入ってしまいました。（下段右）三味線。犬の皮が使われていたというのは、衝撃の事実でした。（下段左）三国屋楽器店のご主人、田村武さん。いろんなお話を聞かせてくださいました。

生の犬ぐらいの大きさじゃないとダメだそうです。また、太鼓や琴についてもいろいろ教えてくださいました。

ここのお店周辺は「東倉吉町」といって、米子なのに「倉吉」という地名が入っていました。それは昔、この周辺には倉吉出身の人が多く住んでいたことに由来するそうです。もちろん「西倉吉町」もあるそうです。

三国屋楽器店を出て少し歩くと、リヤカーで野菜を売っているおばあちゃんたちに遭遇しました。週に二回、安来から売りに来ているそうです。何十年も前からやっておられるベテランでした。年齢は八十八歳と聞いてびっくり。こうやっていろんな人と接しておられるのが元気で長生きする秘訣なのかなと思ったり……。安来からリヤカーを引いて来たのかと思ったのですが、そんなはずもなく、軽トラで送ってもらっているそうです。手作りの野菜や漬物、梨などを売っておられました。写真を撮らせてくださいとお願いしたら、「こげな顔いけんわい（こんな顔ダメだわ）」と言って断られてしまったので、リヤカーと商品たちだけ撮らせていただきました……。

少し歩くとまたもや野菜を売っているおばちゃんたちを発見。野菜を見ていると声をかけてくださいました。大山のふもとにある溝口町（現伯耆町）という町のＪＡ支部女性会の方々でした。普段は毎週土曜日に手作りの野菜などを売りに来ているそうです。この日は水曜日だったのですが、お盆の時期だったので朝からお花を売りに来たんだそうです。「溝口をしっかり宣伝して！」と言われてしまったので、溝口の名前の入ったエプロンをつけてみんなで集合写真を撮りました。とてもノリがいい方々で、楽しくお話させていただきました。

現在、本通り商店街はシャッターを下ろしているお店も少なくなく、少し寂しい感じもしました。しかし、不定期に催されている、戸板一枚の上で様々なものを売る「戸板市」や、夏期には恒例の「土曜夜市」などもあり、多くの人で賑わうそうです。

商店街をさらに歩いていくと、なにやら雰囲気のある、歴史を感じさせる建物が。入り口には「日本クローム工業株式会社」「株式会社大寺屋船越」「大寺屋商事株式会社」と書かれた三枚の立派な看板が掲げられています。クロームって何だろう？　そう思った私たちは思い切って玄関のベルを鳴らしました。奥さんが出て来られて、いきなりの私たちの質問に、親切に答えてくださいました。

■（上段）溝口町のＪＡ支部女性会の皆さんと一緒に。（下段）野菜売りのおばあちゃん。

クロームとは金属の一種で、この会社はどうやらクローム鉱石を採掘していた会社のようです。もうだいぶ前に操業を停止したようですが、日南町に若松鉱山という、日本では数少ないクローム鉱石を産出する鉱山があって、「日本クローム工業株式会社」はこの鉱山を経営していました。ここでとれるクロームは主に溶鉱炉の耐火煉瓦を製造する際に使われていたそうです。

「なるほど、クローム鉱石なるものがあったんだ」と頷いていると、奥から旦那さんも出てきてくださって、いろいろと説明してくださいました。先ほどお

■日本クローム工業株式会社の正面。

じゃました「末広がり」の船越家と同じように（こちらも船越さんですが先ほどの船越さんとは関係はないそうです）、とても天井が高く、広くて立派な家です。江戸時代末期に建てられたそうです。京都出身の女流日本画家、上村松園に描いてもらったという襖絵もありました。

蔵の前に小さなクローム鉱石が転がっていました。持ってごらんと言われて手に取ってみると、ずっしり。大きさの割にとても重たいものでした。

これはあとで調べてわかったことですが、ステンレスは鉄にクロームを加えた合金。クロームってとても身近なところに使われているんですね。

同じ商店街の中に「松田染物店」という名のお店がありました。店内の壁にはいろいろな旗が飾ってあります。鮮やかな色の組み合わせの大漁旗が目を引きます。なんだか面白そうだなあと思っておじゃますると、先ほど野菜市で見かけた女の方が畳に座って仕事をしておられました。この方は松田美智子さん。仕事中でしたが、私たちの取材に快く応じてくださいました。

■（上段）クロームの船越さんのお宅にあった蔵。（下段）庭石として飾られているクローム鉱石。

■松田染物店正面。

松田染物店は一七〇二年（元禄十五年）から三〇〇年続く老舗で、現在十三代目なのだそうです。すべて手作業で、引き染めという方法（刷毛に染料を含ませて染めていく方法）で、大漁旗をはじめ校旗、社旗、団旗、応援旗、暖簾、風呂敷、宣伝幟などを作っておられます。

やはり大漁旗には力が入っているようです。これまでに手がけた大漁旗の写真ファイルを見せながら、漁船が新造されると一隻の船に何十枚も大漁旗が贈られる場合もあること、最近では飲食店や食品店などの店舗に飾るための大漁旗の注文もあることなどをお話してくださいました。

三〇〇年も続く歴史ある染物屋さんが今も続いていることをとても嬉しく思いました。それと同時に、伝統を引き継いでおられることは本当にすごいことだなあと思いました。これからも代々続いてくれることを祈らずにはいられない気持ちになりました。

街の探検の締めくくりはお昼ご飯でした。真夏の焼け付くような日差しとうだるような暑さのなかを長時間歩いてきた私たちは、もう汗だくでヘトヘトになっていました。

そろそろお昼にしようか、ということになり、本通り商店街の中にある、なんと五〇〇円で食べられるというワンコインレストラン「ビッグ」に入ることにしました。みんなそれぞれに好きなメニューを頼み、失ったエネルギーを補給しました。五〇〇円なのにボリュームがあって美味しい！　激しい労働（？）のあとのご飯は最高でした。

五回目の「街のおもしろ文化観察学」は米子でしたが、近くに住んでいても全く知らなかった面白い発見がたくさんありました。実際に歩いてみないと出会えない建物やお店や街並みはとても興味深く、地元の方たちとの出会いもとても楽しく、良い経験になりました。

（ごんだ・まこ／日本語文化系一年生）
（うえだ・えりこ／文化資源学系一年生）
（たけのした・みほ／文化資源学系一年生）

■（上段右・左）松田染物店では様々な旗を作っておられます。壁には大漁旗、校旗、応援旗など、たくさんの旗が飾られていました。（下段）仕事中の松田美智子さん。お忙しいところにおじゃましましたが、快くお話をしていただきました。実は、あの野菜売りのおばあちゃんのところでお会いしていました。

編集後記

「本当に、ちゃんとできるよね え？」――これが私に対する編集長の口癖でした。私は何でも締め切りギリギリまで引き延ばし、いつも編集長に心配をかけていました。でも、「大丈夫、大丈夫」が私の口癖でした（笑）。

そんな私ですが、自分の担当以外の取材にもたくさん行ったので、きっと誰よりも多くの体験をすることができたと思います。たまたま出会った方に突然お話を伺うなんて、正直なところ無茶だと思っていました。私の芝の取材でも、話しかけるまでは憂鬱で、作業中なのに絶対厄介だろうなとか、消極的でした。しかし、どの方も気持ちよいほど快く取材に応じて下さいました。

さらに、表紙の撮影にも参加しました。モデル四人はそれぞれ原色のTシャツを身につけ、同じ道を何度も歩きました。車の人に横目でチラチラ見られるわ、カメラを意識しすぎてぎこちない歩き方になるわで、なかなか大変でした。

しかし、無事に出来上がってみると、これで終わりなのかと、ちょっぴり寂しい気持ちです。編集長にはたくさん迷惑をかけたけど、個人的には本当に楽しい取り組みでした。（藍花）

街歩きの取材メンバーの中で唯一の米子人だったこともあって、「おもしろいネタを見つけなければ」という若干のプレッシャーを感じていたので、下見も何回か行きました。「これ、本番大丈夫か……」と不安を抱きつつ取材に臨みました。

「おっ、老舗の自転車屋さんがある！」と思ったら、まさかの定休日でがっくり。初めての取材で、アポも何もない突撃訪問はなかなか勇気のいるもので、インターホンを押すのもいちいち緊張してしまいました。いきなりの訪問にポカーンとされた方もおられましたが、みなさん快く応じてくださって本当に有り難かったです。

誌面のレイアウトというのがまた大変で、裏ではこんな細かい作業もしているのかとびっくりしながら、パソコンとにらめっこ。試行錯誤しながら、なんとか完成させることが出来ました。こんな経験も『のんびり雲』の編集委員にならなければ出来ないことなので、いい経験をさせてもらっているなぁ、なんて思ったり……。協力してくださったみなさん、ありがとうございました！（絵里子）

長芋の取材を終え、締め切りに追われながらも原稿は完成！誌面のレイアウトもなんとかやり遂げました。これで私の仕事は終わったとホッとしていたところに編集長からのお呼び出し。「どうしたのかなあ？」と思い編集長の部屋を訪れてみると、机の上には校正刷が何十枚も……。まだ校正という仕事が残っていたのです。誤字脱字はないか、おかしな文章はないか、文字の大きさや形は決められたとおりか、写真の配置は大丈夫か……と、全部のページを細かく見直す気の遠くなるような作業。

「疲れた～」や「ハァ～……」といった言葉が増えるなか、間違いをひとつ見つけるたびに嬉しくて興奮してしまいました。私は校正がこんなに大変な作業だとは知りませんでした。雑誌を作るということは、ただ取材に行って記事を書くだけではないことを教えられました。

「『のんびり雲』を作ってみたい」と思って始めた編集委員ですが、たくさんの人の温かさと笑顔に出会い、今では「『のんびり雲』を作れてよかった」に変わりました。素晴らしい出会いにありがとう！（早紀）

今回の特集「山陰の農村　ほっこり出会いの旅」では、これまで試みたことのない取材方法に挑戦しました。畑や田んぼで偶然出会った人にお話をうかがい、その「ほっこり」した出会いを記事にしようというわけです（北栄町と奥出雲町は例外）。

農作業中の人に出会えるかどうかは、天候や季節にも左右されます。出会えたとしても、誰もが取材に応じてくださるとは限りません。近くなら出直すこともできますが、片道二、三時間もかかる鳥取市や浜田市の場合は、そうもいきません。取り上げる作物の作業時期などに関する情報を集め、それでも心配な五地点については下見にも行きました。

でも、大丈夫でした。何とかなるものです。おかげさまで、どこでも「ほっこり」した「出会いの旅」が実現し、大収穫でした。（大）

のんびり雲　第４号

2010 年 10 月 20 日発行

編集　「のんびり雲」編集部
　　責任者：大塚　茂
　　e-mail: s-otsuka@matsue.u-shimane.ac.jp

発行　島根県立大学短期大学部
　　松江キャンパス
　　総合文化学科
　　〒 690-0044
　　島根県松江市浜乃木 7 丁目 24-2
　　TEL. 0852-26-5525（代表）
　　FAX. 0852-21-8150

印刷　今井印刷株式会社

制作協力　小泉　凡　小倉佳代子

制作指導　鹿野一厚　大塚　茂